

はしがき

この小著は、大学で国際関係を専攻する人びとのために書かれたものである。大学4年間の教育課程のうち、3・4年次では研究書を使った専門教育が教育の柱となるが、1・2年次では専門教育をうけるための準備がおこなわれる。専攻する学問領域で何を学んでいくのかをしっかりと理解し、その学問が拠って立つ人間観や世界観、それらを視点としたときに現れる社会との関わり方を身につけるのである。

本書は、国際関係の教育プログラムで初年次の基礎科目を担当する者が集まって、国際関係という学問の基礎を示したものである。各章は、教育プログラムの柱となる講義について、ねらいや特色をよく示す題材を選んで概説している。初学者には難しいと思われる言葉や事項には注で説明をつけたので、国際関係に関心のある高校生や社会人にも読んでいただけるものに仕上げたつもりである。この分野での学部や学科で学ぶことを考えている人が、その進路を決める際の一助になれば幸いである。

国際関係の教育プログラムは大学によって多様である。本書が提示したのは、著者たちの所属する北九州市立大学外国語学部で展開している国際関係教育のエッセンスであり、独自の個性がある。各大学で教育内容が異なる理由の第1は、国際関係という学問の性格がある。

激動する世界情勢を正しく理解し、より良き秩序に向けて何をなすことができるかを考えることが、国際関係の出発点である。現実世界での実践を志向する以上、必要な知識も多岐にわたり、国際関係という名で取り扱われる分野や対象ははなはだしく広がる。また、学問の内容を決める指針となる学界動向も新しい理論や方法が次々と提唱されることによって、めまぐるしく変わっていく。このため、限られた人材で教育をおこなうとき、大学に集まった教員の観点が講じる項目の取捨選択に作用し、プログラム内容が特有の傾向をもったものになっていく。

第2に、日本では1991年に政府が大学設置基準を改正したことも、個性をもったプログラムづくりに影響を与えた。この改正で、国際関係の学位を取得する際に必要な教育課程を組み立てるとき、各大学は自分たち独自の特色のあるものにすることができるようになった。その結果、国際関係論や国際関係史、国際機構論といった各大学で共通にある中核的な科目でも、講義概要を見るとそれぞれの大学で重点を置くものに違いが見られることが、普通になったのである。

われわれが国際関係を学ぶ初学者向けの著作の出版を計画したとき、いずれの大学でも使える標準的テキストをつくることは考えなかった。本書を編むうえで指針としたのは、内容を幅広くし、最新の知識をバランスよく盛り込んで体系的に論述することではない。目指したのは、国際問題への関心を深め、読者が自分自身の力で問題を考えていくように促すことであった。実のところ、そのような関心喚起は、北九州市立大学の教育プログラムの初年次教育で実践しているところでもある。

本書の各章は、上述したように、執筆者が勤める国際関係学科に配置された中心的な科目の代表的トピックスを文章化したものである。10章構成の本書は2部よりなっている。第I部「さまざまな国際問題を考えよう」では、経済のグローバル化、国際安全保障、地球環境、国際連合、東アジア共同体を論じた章を、第II部「さまざまな地域を学ぼう」では、アメリカ合衆国、イギリス、中国、東南アジアを扱った章を配している。第I部、第II部の冒頭には、国際関係学、地域研究とは何かをわかりやすく示した文章を置き、読者が各章の内容に関心をもてるように工夫をはかった。どのようなかたちで国際関係への興味関心を深めているか、一歩進んだ専門の学習へと学生を導くのが、われわれが授業でもっとも力を注いでいることである。この姿勢は本書でも変わらず、国際関係を知ろうとする人にとって、親しみやすい構成になるように工夫をはかった。

ところで、国際関係を教育するプログラムの目的が、世界を舞台に活躍する人材の育成にあることはいうまでもない。1980年代以降、日本の多くの大学で国際関係を教える学部や学科が設置された背景は、21世紀の到来を間近にして日本が経験した急激な社会変化にあった。

そのころ日本は世界のGNPの1割を占める経済大国となっていた。1982年に

成立した中曽根康弘政権は、その経済力にふさわしい国際社会での責任ある行動を果たすべく、世界のさまざまな問題に積極的に関与する方針を打ち出していた。実際、1980年代後半、昭和から平成へと時代が移ろうとすると、20世紀世界を揺るがす大きな地殻変動が起こる。1991年の湾岸戦争とソビエト連邦の崩壊は、新たな時代の到来を如実に示す出来事であった。米ソ対立の解消は軍縮によって世界経済を好況に導き、旧社会主義諸国での市場経済の導入と中国をはじめとするアジアの経済成長は貿易を拡大させた。世界の急激な変貌を前にして日本は、21世紀という時代への備えをするため、国家の枠を越えたグローバルな視野で行動できる知識と高度な外国語運用能力をあわせもつ人材を育成することが差し迫った課題となっていた。

こうした課題に応えるため、北九州市立大学外国語学部国際関係学科が設置されたのが、1993年である。英語のほか、中国語か朝鮮語のいずれかを必修の外国語として徹底的に教育し、地域研究の対象を英米と東アジアに絞っていることが、その教育プログラムの特徴である。

設置以来、17年を経て2010年3月までに卒業生数は1038名になっている。その多くは民間企業に就職しているが、教職課程を履修して英語教員になった者、公的機関への道を選んだ者も少なくない。外務省や国際協力機構（JICA）に勤めて、海外との架け橋となった者もいる。人材の輩出で鍵となるのは、もとより、学生個人々の努力である。ただ、本学科の教育プログラムのユニークさが海外に関心をもつ受験生を引き寄せていること、入学後の学修によって身につけた知識や経験、鍛えられた人間の力が、卒業後の進路に貢献していることも確かである。

20世紀末から世界秩序は度重なる危機を経験している。冷戦は終わったものの、21世紀が開幕するとテロとの戦いが始まる。不況なき経済成長が実現したかに思われた1990年代の世界経済の状況は、1997年のアジア通貨危機、2008年のリーマン・ショックの発生によって、実は不安定な基礎のうえに築かれていることが誰の眼にも明らかとなった。世界に安定した秩序を築くために活躍する人材の育成は、ますますその重要度を高めている。本書がそうした人材育成に貢献するものとなることを執筆者一同が祈念している。

大学教育の実践から生まれた本書は、北九州市立大学外国語学部国際関係学科の教員とその授業に参加した学生の接触から生まれたものである。本書の企画は2006年度から始まり、2008年度に最初の具体的な構想が固まったのち、その一部変更を経て、ようやく完成を見た。草稿を授業教材に用いた際には、在校生の皆さんの協力を得た。また、執筆者間で草稿を熟読し、互いに忌憚のない意見を述べ合ったことで、出版企画の当初からわれわれが目的としたFD活動（教育の質の向上をはかるための取組み）についても、大きな成果を得たように思う。この書を同学科の学生に捧げるとともに、現役学生、卒業生たちの意見を幅広く聞くことで教育プログラムの改善をおこなうことを期して、本書のはしがきとしたい。

2010年12月

編 者